

小田原市教育委員会協議会会議録

- 1 日時 平成21年2月26日(木) 午後8時22分～午後8時46分
場所 小田原市役所 601会議室

2 出席した教育委員の氏名

- 1番委員 山田浩子
2番委員 青木秀夫 (教育長)
3番委員 桑原妙子 (教育委員長職務代理者)
4番委員 和田重宏 (教育委員長)
5番委員 山口潤

3 説明等のため出席した教育委員会職員の氏名

- 学校教育部長 和田豊
教育政策課長 曾我勉
学校教育課長 柳下正祐
教職員担当課長 西村泰和
課長補佐・学事担当主査事務取扱 栢沼一郎
課長補佐兼指導主事・指導担当主査事務取扱 長澤貴

(事務局)

- 教育政策課課長補佐・教育政策担当主査事務取扱 座間亮
教育政策課上級主査 望月啓一郎

4 議事

(1) 報告事項

- ①平成21年度学校教育のねらいと基本方針について(学校教育課)

5 議事の概要

(1) 報告事項

①平成21年度学校教育のねらいと基本方針について（学校教育課）

学校教育課長…協議事項「学校教育のねらいと基本方針」について説明いたします。資料1を御覧ください。平成17年8月1日、小田原市は、教育都市を宣言しました。この趣旨を踏まえ、21世紀を担う子どもたちの「生きる力」を育み、地域性を生かした学校教育の創出に向けて「小田原市学校教育推進計画・おだわらっこ教育プラン」を策定し、小田原の資産や資源を生かして、地域とともに歩む学校づくりを進めてきています。この小田原市学校教育推進計画を受けて、資料1「平成21年度 学校教育のねらいと基本方針」が作成され、裏面には、21年度の学校教育に関する取り組みの重点が示しております。さらに、重点を図式化したものが、3ページ目のグランドデザインになります。このグランドデザインをもとに、簡単に概要を御説明いたします。

魅力ある学校で、豊かな人間性・確かな学力などの「生きる力」を育むことが、教育長の方針①である「子どもの幸せ」につながると考えます。そのためには、子どもたちに豊かな人間性・確かな学力などの「生きる力」を育むことが、一人ひとりの「子どもの幸せ」につながると考えます。特に、来年度は「確かな学力の向上」を最重点課題と位置づけ、各種事業を進めてまいりたいと考えております。その具現化のためには、各校におかれましても、引き続き「確かな学力の向上」という視点から、子どもが幸せを感じられる魅力ある学校づくりを進めていただきたいと考えております。教育委員会としましても、具体的には、教職員アカデミープランの中で、「教員としての指導力」「教職への情熱」「社会人としての資質」といった教師力の向上を図っていくことによって、教育長の方針②である「良い先生」を一人でも増やしていかれたらと考えています。また、わかる授業の充実を図るために、全国学力・学習状況調査の分析結果や、多面的な授業評価を実施し、授業改善に努めてまいります。また、来年度も引き続き、小学生を対象に「おだわらっこチャレンジ検定」を実施し、基礎学力の向上・学習意欲の向上に努め、漢字が書けない、かけ算ができない状態で中

学入学することがないようにしていきたいと考えています。さらに、子どもたちは、学校だけで成長しているわけではありません。家庭や地域の中で、様々な人から直接的・間接的に多くのことを学び、成長しています。そこで、縦軸としての幼・小・中一体教育と横軸としての地域一体教育を関連づけ、子どもが成長していく教育環境すべてを「面」として「空間」としてとらえ、「地域一体まちぐるみの教育」を推進しています。その実現のための核となる存在が学校です。だからこそ、これからの学校は、「子どもの幸せ」という共通の視点に立って、保護者・地域の方々・教職員の三者が常に集い、学び合えるような魅力ある場になってほしいと考えています。このような理念に基づき「グランドデザイン」は作成され、具体的に数値目標を掲げております。これと「学校教育のねらいと基本方針」を参考にして、各学校が来年度の教育計画を作成するようになります。

また、これらの達成のために、来年度は、学校教育課や教育研究所の指導主事を積極的に学校に派遣をしていきたいと思っています。研究授業の中での指導助言のほか、授業参観や各学校の研究会や会議等にも参加し、少しでも現場の力になればと考えております。

(質疑・意見)

桑原委員…おだわらっ子チャレンジ検定の受検者目標の60%というのは、どういった数字ですか。

学校教育課長…受検希望者が60%を超えてほしいという意味で、できれば100%がいいのですが、まず60%ということです。

桑原委員…現状はどのようなのですか。

学校教育課長…50%に届いたかどうかといったところです。

和田委員長…学力の向上が、学校で一番重要なことなのは良く分かりますが、応用力、これは生きる力に結びついていくと思いますが、これについて学校教育の中で、どのように取り組んでいこうとしていますか。

学校教育課長…全国学力学習調査の中でも応用力が少ないと出ております。これをどう育むかで、研修などを立ち上げていきますが、やはり学習に魅力を感じさせるような授業の展開が一番だと思います。そして「学び合う」、友達の意見を聞いて、自分の意見と比べる、そしてさらに豊かな意見を作り上

げていく、また自分の意見と異なっている、相手の意見を否定するのではなく、それがあるからこそ自分の意見の正しさがわかったというような学びの連続をしていくことが大事だと思います。また、算数や理科もそうなのですが、聞く力、文章をきちっと読む力も大切ですので、読書を大事にしていきます。また、人やものと関わる力が大事と考えております。異学年との交流も含め、自分以外の考え方、ものの見方、感じ方を十分に体験できる、自分を高めていく力が持てるような子どもを育てていきたい、そしてそういう力をつけられる教師を育てていきたいと考えています。

和田委員長…互いに意見を言い合うことはコミュニケーション力にもつながっていくわけですが、たとえばドイツでは、幼稚園から大学の先生まで、子どもの質問にどう答えられるかが教育の中心だということです。そして2年に1回は、トレーニングを受けなくてはならないそうです。私も教師の経験がありますが、研究授業で生徒に意見を求めたとき、こちらで用意した答えが出るまで当てつけ、違う意見は「そういう意見もあるね」と切り捨ててしまったことがありました。質問するには聞かなければならないわけで、そういう「質問する力」を教育の中で考えるべきだと思います。「何を言っても先生は受け止めてくれる」という安心感が、日本の教育には欠如しているのではと思います。教師が授業の能率を考えてしまっているのではないのでしょうか。どんな意見も上手に授業の進度の中に入れていく力が重要だと感じます。子ども同士というより子どもと教師の間のコミュニケーション、教師の質問の処理力というものが大切だと思います。

学校教育課長…ご指摘は大変重要なことだと思います。教師が共感的な理解をしてあげないと、子どもが安心して授業を受けられないと思います。「この先生は信頼できるから、たとえ間違っても話してみよう」という感覚を持たせるのが大事だと思います。確かに一昔前の授業は、教師が用意した答えが出れば次に進み、違う答えは切り捨てられてしまう感じがありました。今はそうではなく、違う答えが出たとき、それをどういうように生かすかが、教師の醍醐味で、そういう力をつける研修も今後やっていきたいと思っております。

和田委員長…ぜひ、お願いします。

桑原委員…子ども同士が教えあうのも、自分が分かるまでの過程を相手に説明することができ、先生が教えるより、理解が違うような気がします。

学校教育課長…それも大事でして、理解する過程はそれぞれ違うわけで、似たような仲間同士が教えあうことは非常によくあります。仲間同士で答えを獲得するのは非常に重要なことです。それは信頼感にもつながるし、お互いの良さを認めることにもなります。

桑原委員…今は機械的なものばかり多いですが、このような、気持ちを通わせるような取組みを進めていくのでしょうか。

学校教育課長…指導要領の考え方もそのようになっております。

和田委員長…先日、小学校1年生になる子どもの保護者に対して話す機会がありました。ほぼ100%の参加で、ほとんどが若い母親でした。30分の時間でしたが、話し始めても、3箇所私語が止まず、全然聞こうとしませんでした。義務的な参加だったようですので、そういう人たちもいるとは思いましたが、校長先生以下が、同席しているのに、これを放置していました。人の話を聞くことがコミュニケーションの第一ですから、まず親から、こういう機会から親の指導を行うべきではと思いますが。子どもに対し、いくら学校で立派な指導をしても、家に帰ればこういう親に育てられてしまいます。

桑原委員…子どもの教育の前に親の教育ということでしょうか。

青木教育長…人間関係の希薄化や地域の弱体化の問題があり、家庭や地域で、子どもが身につけるべきものをつけさせていないことが、学校において現れていると思います。聞いた話ですが、日本人と結婚した西欧人の母親が、子どもが麺をすすったことでひどく叱ったそうです。日本で麺をすするのは当たり前なのですが、母親は、子どもを「ジェントルマン」に育てたいという思いがあったようですが、親の思いというものが、今、なかなか子どもに伝わっていないのではと感じます。おだわらっ子の約束もこうした背景があるところだと思います。

桑原委員…当たり前のことが、当たり前でなくなっているのでは、と思います。

青木教育長…本市の中学校の英語の授業で「人の話は相手の目を見てきちっと聞く」と指導していました。これは本来なら家庭の中で、地域の中で、教えていく

ものでしょうが、とにかく、だれかがやらねばということだと思います。
学校教育課長…「学級懇談会」という場で、保護者に子どもの様子を伝えていくのですが、その中で、話を聞くことの大切さを親にもきっちり伝えていくべきだと思います。また、「言葉は私の命のかけら」と話された講演者がいられましたが、大事な言葉を受け止めて、それを返すという経験、学習をきちっと子どもにさせていく、また保護者にも伝えていくことが学校にできることだと思います。また、地域の中で、年配者が苦言を呈するようなことも必要ですし、おだわらっ子の約束にも「人の話をきちんと聞きます」とありますし、こうしたことからの取組みも必要だと思います。

青木教育長…親ができなければ、ある意味、学校でやらなければ、ということになってしまう問題なのかなと思います。

桑原委員…先ほどの話ですが「親はしゃべるものだ」と先生は思っているということでしょうか。

和田委員長…そのようです。親を指導するいい機会のはずだったのですが。

山田委員…全員で集まるのはそんなに機会がないはずですね。

(その他質疑・意見なし・協議会を終了)